

カール・ヴィッテは 1800 年、ドイツの小さな村に牧師の子として生まれました。牧師だった父は、非常な卓見たくけんの持ち主で、当時としては驚くべき独創的な教育論をもっていました。それは一言で言へば、「子供の教育は、子供の知力が見え始めたと同時に始めるべきだ」といふものでした。さうすれば、たいていの子供は将来非凡な人間になるといふのです。ただし、彼はその著書の中でかう言っています。「自分は天才を作るつもりで、このやうな教育をわが子に施したのではない。ただ円満な人格の人間を育てようとした結果、このやうになったのだ」と。

とかく早教育や英才教育は批判まの的になります。かういふ教育の結果、偏かたよった人格や病氣勝ちの弱い肉体の持ち主になってしまふといふ心配をする人があります。それにカール・ヴィッテの父親は答へたといふわけです。実際には、カール・ヴィッテは偏かたよった人格とはおよそ程遠い円満な人柄で、健康面でも八十三歳といふ当時としては大変な高齢まで元気で法学者としての仕事を続けてみましたから、かういふ批判は当りませんでした。

以下、カール・ヴィッテの受けた教育について、少しく詳述したいと思います。出典は『早教育と天才』（木村久一著・玉川大学出版部）です

ので、さらに詳しい事を知りたい方はお読みになって下さい。

カール・ヴィッテは、幼児期にすでに三万語の語彙ごいを持ち、フランス語、イタリア語、ラテン語、英語、ギリシア語をマスターし、特に数学では将来しよくばうを囑望される程の才能を示しました。僅か九歳でライプチヒ大学に入学を許され、十三歳で哲学博士、十六歳で法学博士になり、ドイツの各大学で法学の講義を行ひました。かたはら、イタリア留学中に興味いだを抱いたダンテについても、その道の専門家も舌を巻く程の研究があったといふ多方面にわたる学者でありました。

さて、カール・ヴィッテの父が息子に早教育を施した直接のきっかけは、教育者と牧師とから成るグループの間の議論から生れました。まだカールが生れる前のことでしたが、「子供の能力を決めるのは遺伝か、それとも後天的な教育か」といふ議論が、このグループの中で、交かはされたのです。カール・ヴィッテの父は、以前から、「遺伝より、教育が大事だ、それも生れた時から五、六歳までの教育の良し悪しによって決まる」といふ意見を持っていましたので、それを主張しました。しかし、この説を支持したのはわづか一人だけで、他の人々は皆こぞって反対したので、「では、もし私に子供が出来たら、その子を私の教育で非凡な

人間に育て上げてお目にかけてあげよう」と言ったのださうです。

その後間もなく、子供が生まれましたが、残念なことに、この子は死んでしまひました。次に生れたのが、カールでした。父親はこの子を自分の信念に従って、細心の心づかひをもって育てたのです。

ここで注目したい事は、カールは決して生れつき知能の勝れた子供ではなかった事です。反対に、白痴かと思はれる程、鈍い子供だったさうです。母親でさへ、「こんな子は教育しても駄目です」と、諦めてみたといひます。しかし、父親の方は、諦めませんでした。

「我々は子供を社会に送り出すにあたって、出来るだけハンディキャップを少なくしてやる義務がある」と考へてみた父親は、英知の限りをつくしてカールを教育しました。

彼の教育の根本理念はかういふことでした。

「子供の生れつきの可能性を 100 とした時、子供を放りっぱなしで育てれば、その能力は発現を見ることが出来ずにどんどん減ってしまふ。五歳になれば 80 に減り、十歳になれば 60 に減り、十五歳になれば 40 に減るといふ具合に。だから子供を育てるのに大切なことは、時期を失はないうちに、潜在的な能力を発達させることである。それには、早く

から子供の能力に働きかけ、これを発達させなければならない。つまり、子供の中に少しでも知力が芽生えたと見えたら、ただちに始めなければならない。では具体的にはどうすればよいのか。それは子供に早くから言葉を教へることである。言葉は知識を刈り入れる道具に他ならないから、言葉を早く、多く教へることによって、知識を獲得する能力は、素晴しく大きなものになるに違ひない」

そして彼が実践したやり方といふのは、かうでした。赤ん坊のカールの前に指を出して動かしてみせます。すると、カールは指をつかまうとして手を伸ばします。最初は見当がはずれて、なかなかつかめないのですが、つひには成功し、大喜びで父親の指を口に入れて吸ひ始めます。すると父親はその時、ゆっくりとはっきりした口調で、「ゆび、ゆび」と何回か言ふのです。

このやうにして父親は、カールの目の前にいろいろな物を出して、その名前をゆっくり、そしてはっきりした口調で数回発音して聞かせました。するとカールは間もなく、さうした物の名前をはっきりと発音できるやうになりました。

次には、カールを抱っこして家の内外の物、道具や衣服、草木や花、

虫、そして動詞や形容詞などの言葉も、教へました。そして、かういふ物事を教へる時には、皆、カールとの簡単な、しかし楽しい会話の中で教へました。根気よく、しかし、無理矢理に、詰め込まうとするのではなく。

かうしてカールが少し話を理解するやうになりますと、両親は毎日カールにお話をして聞かせました。そして又、カールにそのお話を繰り返させました。さうしないと、そのお話の効果が十分に上がらないからです。

この結果、カールは、五、六歳までの間に約三万話の単語をやすやすと覚えることが出来たさうです。そして、これも大事なことですが、カールの父親は、決してカタコトや方言を使ひませんでした。そしてカールが正しく発音した時には「上手だね」と言って頭をなでてほめました。正しく発音できないと妻に「お母さん、カールは何々と言へないよ」などと言ひ、妻の方も、「さうですか、そんなことが言へないんですか」などと答へました。すると、幼いながらも、カールは懸命に正しく発音しようと努力して、つひにはそれが出来るやうになったといふことです。かうして、まだ親に抱かれてゐるうちから、カールは言葉を極めて明晰に

喋ることが出来たのです。

また、父親はカールが単純な言ひまはしに満足せず、複雑な言ひまはしを理解したり、自分でも使つたり出来るやうに教育しました。そして、あいまいな言ひまはしをせず、極めてはっきりした言ひ方をするやうに注意しました。これは、頭を明晰にするには、まづ言葉を明瞭にする必要があるとの彼の持論から出た事でした。それで、両親はまづ自分たちが、正しく美しいドイツ語を使ふやうに努力したさうです。

カールが読書を始めたのは三歳半の頃でした。父親のやり方はかうでした。まづ、子供向きの絵本などを買って来ます。そして、それについて、カールに面白く話して聞かせてから「お前が字を読むことが出来れば、こんな事が皆解るんだが」などと言って、好奇心を刺激しました。また、全く話をして聞かせずに「この話はとても面白いのだけれど、とても話してやる暇が無い」などと言ふ事もありました。いづれにせよ、カールとしては何とかして字を読むことを覚えたいといふ気になるわけです。さうなってから、始めて字を教へたといふことが書いてあります。これも非常に大切なことだと思ひます。

カール・ヴィッテの父親は大変聡明な人でした。その躰は厳格では

ありましたが、専制的ではありませんでした。子供の判断力を育てることに主眼を置き、叱る時にも一方的に叱ることはせず、なぜそれが悪いのかを納得できるやうに説明してやりました。

例へば、こんな例があります。これは、カール・ヴィッテの父親自身が書いた『カール・ヴィッテの教育』（この本は、今はアメリカのハーバード大学に一冊だけ残ってゐまして、これを読んで実際に実施したハーバード大学関係者の子女に英才が何人も出てゐるさうです。皆、心身共に優れた若者で、将来が楽しみだといふことです。これについても前記『早教育と天才』に詳述されてゐます）といふ本の中で書いてゐることです。

「息子が無遠慮な事を言った時は、私は即座に叱ることをせず、『息子は田舎者ですから、こんな事を言ふのです。どうぞ悪く思はないで下さい』などと言っておく。すると息子は、これは悪いことだと悟って、必ず後になってからその理由を質問する。その時初めて『お前の言った事は本当だ。お父さんもそれを認める。しかしそれを、人の前と言ふことはよくない。お前があんなことを言ったものだから、　　さんは恥かしくて顔を赤くしたのではないか。　　さんはお前を可愛がってゐるし、

お父さんに遠慮をしてゐるから、黙つてゐたけれども、よほど気を悪くしたに違ひない』といふふうに説明して聞かせ、子供の判断力を傷つけないやうに努める」

かういうことが大切なのであって、子供の教育といふものは、ただ知識を詰め込むだけでは何にもなりません。かういふ父親に教育されただからこそ、カール・ヴィッテは当時の人々に尊敬される大学者になったのです。皆さんも、お子さん方に、かういふふうな態度で接し、その持つてゐる可能性を最大に発揮できるやう、やってみていただきたいと思ひます。

他にカール・ヴィッテの教育で重要な点を二、三挙げますと、次のやうなことです。一つは、子供の質問に丁寧^{ていねい}に答へること。普通、子供といふものは、二、三歳頃^{ころ}から、うるさいほどいろいろな事を尋ねるものです。それをたいていの親はいい加減に答へたり、うるさがったりして、子供の好奇心を育ててやらうとはしないものです。そして、そんなことはいまに学校で教へてくれるからよい、と思つたりしてゐるわけです。ところが、これが大きな間違ひで、子供の能力は、こんなふうにしてゐると、全く成長できずに枯れてしまひます。ところが、カール・ヴィッテの

父親は、質問を奨励し、またそれに丁寧^{ていねい}に答へました。そして決してごまかしの説明をしませんでした。カールにも解^{わか}るやうな平易な説明を心掛け、また、自分も知らないやうな事は、「それはお父さんも知らない」と正直に答へて、二人で本を読んだり図書館に行ったりして調べるやうにしました。これは忙^{いそが}しい親にとって決してやさしいことではありません。カール・ヴィッテの父には牧師としての忙^{いそが}しい務めがありましたから、彼にとってもこれは努力の要る事だったでせう。しかし、彼は息子のためといふ信念から、あへてこれをやったのです。そして結果は大いにむく^{むく}酬はれたのでした。

また彼は、教育上大切なことは、子供の頭に知識を詰め込むことよりも、見聞を広めさせることだと考へてみました。そこで彼はカールを散歩に連れ出し、建物や旧蹟^{きゅうせき}などを説明して聞かせました。また、買物や音楽会、劇場、博物館、美術館、動植物園などにも連れて行きました。他に工場や病院、養老院などにも連れて行ったさうです。そして、家に帰ると、母親に見た事を詳しく報告させました。ここが大事な所で、このためにカールはよく注意して物を見、説明を聞くといふ習慣をつけることが出来たのです。小さい時からかういふ習慣が有ると無いのでは

大変な違ひが生れることは読者の皆さんにもよくお解^{わか}りでせう。

もう一つ大切な事は、子供を躱^{しつ}ける時、方針を変へないといふことです。良い事はあくまでも良い事、悪い事はあくまでも悪い事として、最初から方針を決めておかなければいけません。いけない事は初めからいけない事と禁じておけば、子供は苦痛を感じないで済みます。それを、まだ小さいのだから許しておかう、もう少し大きくなれば、解るだらう、と考へるのは誤りだといふのです。これも、親がよく陥^{おちい}りさうな誤りです。「この子はまだ小さいのだから、厳しくしては可哀^{かはい}さうだ」といふ親心が、かへって仇^{あだ}になるのです。白紙のやうな子供の心にとっては、善悪、寛嚴の区別はありません。親のやることは皆当り前のことだと思つてみます。だから最初^{かんじん}が肝腎なのです。いけない事は最初からいけないと言つてやれば、子供は、さうかと思ひます。最初は悪いと思つてゐなかつた事が、途中から悪いと言はれれば、子供の頭は混乱します。真に子供の幸福を願ふなら、最初^{しつけ}の躱^{しつけ}をきちんとすべきです。そして方針を変へないことです。とかく、人はその時の気分で、子供を叱^{しか}つたり甘やかしたりしがちですが、これは躱^{しつけ}にとっては一番いけません。子供の方も敏感にそこを見て取つて、「いけないと言つても、前には良いと言つ

たぢゃないか」と思ひます。すると親の躰しつけが利かなくなります。これは親子双方にとって大変不幸なことです。

また、父親と母親の方針が一致してあるといふことも当然大切なことです。カール・ヴィッテの父親はここに注意して、常に妻と協力して教育しました。ここがうまく行かないと、良い結果は得られたいことは、言うまでもないことと思ひます。

最後に、早教育を受けた英才が陥おちいりやすい危険について触れたいと思ひます。知能の優れた子供は、とかく自惚うぬぼれやすく、傲慢がうまんになり勝ちなものです。これをどうやって防ぐかが問題になります。自惚うぬぼれは、人に嫌きらはれるだけでなく、それ以上の進歩向上の妨さまたげになるからです。

カール・ヴィッテの父親は、あらかじめこの危険を見抜いてみました。そして、カールの勉強ぶりや、善い行ひに対しても、決して褒ほめすぎるといふことをしませんでした。善い行為を認めないといふのは勿論違もちろんひます。しっかり勉強すれば、ちゃんとそれは認めます。が、褒ほめ過ぎはしないのです。非常に善い行ひをした時は、最大の褒ほうび美として、抱き上げて接吻せつぶんしたさうです。かうして、善行は、その行為そのものが楽し

みなのだ、といふことを体得させたといふわけです。褒ほめることによつて子供の能力は引き出されて来るのですが、それも様々な場合に応じで様子を見ながら使ひ分けていかなければなりません。

また、カールの父親は、自分が褒ほめるのを控へただけでなく、他人からの賞賛をも極力避けるやうに努めました。他人がカールを褒ほめさうな時は、カールを部屋から出してやって、賞賛が耳に入らないやうにしました。そしてカールを褒ほめないやうに人に頼み、どうしてもそれを聞き入れず、つい褒ほめてしまふやうな人には家に入出入りすることを謝絶したさうです。このために、人情を知らないとか、頑固くわんこだとかいふ悪評まで受けたさうですが、そんな事はかまはうともしませんでした。人の評判よりは息子の人格を損ふことを恐れたのです。この点でも、カールの父親は意志の強い立派な人でした。

他にも、カール・ヴィッテの教育についてはいろいろと興味深く有意義な事柄がありますが、基本的な点については一応触れましたので、これまでといたします。

次の章では、皆さんが御自分のお子さんたちに、何を、どう教へればよいか、より具体的な方法を記します。この例を参考として、より良い

方法を考へ出し、子供たちを知能と人格の勝れた立派な人にして下さい。カール・ヴィッテの教育に倣^{なら}って自分たちの子供を育てた人たちも異口同音^{いくどうおん}に言^いってゐます。「子供たちの思考力を作るのは幼児期の教育にかかつてゐる。言葉を正確に使へるやうにするのが早ければ早いほど、子供の知力と精神力はより勝^{すぐ}れて発達する。そして、言葉を教へるのは楽しい遊びの中で行はれ、一面では活発な運動も奨励するので、子供たちは体力面でも勝^{すぐ}れた力を発揮できる」

私が四十年間近く行って来て、近頃^{ごろ}やうやく広く認めていただけるやうになった教育は、実は二百年近く前に、すでに実践者が居り、立派な成果を上げてゐました。時の流れの中に埋れてゐた貴重な思想が、私のささやかな教育法と奇しくも合致^{あは}し、今また再度芽吹^{めぶ}いて花を咲かせることが出来れば、これほど嬉^{うれ}しいことはありません。